取舵

泉鏡花

上

「こりやどうも厄介（やっかい）だねえ。」

観音丸（かんのんまる）の船員は累々（やつやつ）しき盲翁（めくらおやじ）の手を執（と）りて、艀（はしけ）より本船に扶乗（たすけの）する時、かくは呟（つぶや）きぬ。

この「厄介（やっかい）」とともに送られたる五七人の乗客を載了（のせおわ）りて、観音丸（かんのんまる）は徐々（じょじょ）として進行せり。

時に九月二日午前七時、伏木港（ふしきこう）を発する観音丸（かんのんまる）は、乗客の便（べん）を謀（はか）りて、午後六時までに越後直江津（えちごなおえつ）に達し、同所（どうしょ）を発する直江津鉄道の最終列車に間に合（あわ）すべき予定なり。

この憐（あわれ）むべき盲人（めしい）は肩身狭げに下等室に這込（はいこ）みて、厄介（やっかい）ならざらんように片隅に踞（うずくま）りつ。人ありてその齢（よわい）を問いしに、渠（かれ）は皺嗄（しわが）れたる声して、七十八歳と答えき。

盲（めくら）にして七十八歳の翁（おきな）は、手引（てびき）をも伴（つ）れざるなり。手引をも伴れざる七十八歳の盲（めくら）の翁は、親不知（おやしらず）の沖を越ゆべき船に乗りたるなり。衆人（ひとびと）はその無法なるに愕（おどろ）けり。

渠（かれ）は手も足も肉落ちて、赭黒（あかぐろ）き皮のみぞ骸骨（がいこつ）を裹（つつ）みたる［＃「裹（つつ）みたる」は底本では「裹（つつ）みたる」］。軀（たけ）低く、頭（かしら）禿（は）げて、式（かた）ばかりの髷（まげ）に結（ゆ）いたる十筋右衛門（とすじえもん）は、

略画（りゃくが）の鴉（からす）の翻（ひるがえ）るに似たり。眉（まゆ）も口も鼻も取立てて謂（い）うべき所（ところ）あらず。頬は太（いた）く瘦（こ）けて、眼（まなこ）は窅然（がっくり）と陥（くぼ）みて盲（し）いたり。

木綿袷（もめんあわせ）の條柄（しまがら）も分かぬまでに着古したるを後褰（しりからげ）にして、継々（つぎつぎ）の股引（ももひき）、泥塗（どろまぶれ）の脚絆（きゃはん）、煮染（にし）めたるばかりの風呂敷包（ふろしきづつみ）を斜めに背負い、手馴（てなら）したる白櫧（しらかし）の杖と一蓋（いっかい）の菅笠（すげがさ）とを膝（ひざ）の辺りに引寄せつ。産（うまれ）は加州（かしゅう）の在（ざい）、善光寺詣（もうで）の途（みち）なる由（よし）。

天気は西の方（かた）曇りて、東晴れたり。昨夜（ゆうべ）の雨に甲板（デッキ）は流るるばかり濡れたれば、乗客の多分（おおく）は室内に籠（こも）りたりしが、やがて日光の雲間を漏れて、今は名残（なごり）無く

乾きたるにぞ、蟄息(ちっそく)したりし乗客等(ら)は、先を争いて甲板(デッキ)に顕(あらわ)れたる。

観音丸(かんのんまる)は船体小(しょう)にして、下等室は僅(わずか)に三十余人を容(い)れて肩摩(けんま)すべく、甲板(デッキ)は百人を居(お)きて余(あまり)あるべし。されば船室よりは甲板(デッキ)こそ乗客を置くべき所にして、下等室は一個の溽熱(むしあつ)き窖廩(あなぐら)に過ぎざるなり。

この内(うち)に留(とどま)りて憂目(うきめ)を見るは、三人(みたり)の婦女(おんな)と厄介(やっかい)の盲人(めしい)とのみ。婦女等(おんなたち)は船の動くと与(とも)に船暈(せんうん)を発(おこ)して、かつ嘔(は)き、かつ呻(うめ)き、正体無く領伏(ひれふ)したる髪の乱(みだれ)に汚穢(けがれもの)を塗(まみ)らして、半死半生の間に苦悶せり。片隅なる盲翁(めくらおやじ)は、毫(いささか)も悩める気色はあらざれども、話相

手もあらで無聊(ぶりょう)に堪(た)えざる身を同じ枕に倒して、時々南無仏(なむぶつ)、南無仏(なむぶつ)と小声に唱名(しょうみょう)せり。

抜錨(ばつびょう)後二時間にして、船は魚津に着きぬ。こは富山県の良港にて、運輸の要地なれば、観音丸(かんのんまる)は貨物を積まむために立寄りたるなり。

来るか、来るかと浜に出て見れば、浜の松風
音ばかり。

櫓声(ろせい)に和(か)して高らかに唱連(うたいつ)れて、越中米(まい)を満載したる五六艘(そう)の船は漕寄(こぎよ)せたり。

俵の数は約二百俵、五十石内外の米穀(べいこく)なれば、機関室も甲板(デッキ)の空処(あき)も、隙間(すきま)なきまでに積みたる重量のた

めに、船体はやや傾斜を来(きた)して、吃水(きっすい)は著しく深くなりぬ。

俵はほとんど船室の出入口をも密封したれば、さらぬだに鬱燠(うついく)たる室内は、空気の流通を礙(さまた)げられて、窖廩(あなぐら)はついに蒸風呂(むしぶろ)となりぬ。婦女等(おんなたち)は苦悶(くもん)に苦悶(くもん)を重ねて、人心地(ひとごこち)を覚えざるもありき。

睡りたるか、覚めたるか、身動きもせで臥(ふ)したりし盲人(めしい)はやにわに起上りて、

「はてな、はてな。」と首(こうべ)を傾けつつ、物を索(もと)むる気色(けしき)なりき。側(かたわら)に在(あ)るは、さばかり打悩(うちなや)める婦女(おんな)のみなりければ、渠(かれ)の壁訴訟(かべそしょう)はついに取挙(とりあ)げられざりき。

盲人(めしい)は本意(ほい)無げに呟(つぶや)けり。

「はてな、小用場(こようば)はどこかなあ。」

なお応ずる者のあらざりければ、渠(かれ)は困(こう)じ果てたる面色(おももち)にてしばらく黙(もく)せしが、やがて臆(おく)したる声音(こわね)にて、

「はい、もし、誠(まこと)に申兼(もうしか)ねましたが、小用場(こようば)はどこでございましょうかなあ。」

渠(かれ)は頸(くび)を延(の)べ、耳を欹(そばだ)てて誨(おしえ)を俟(ま)てり。答うる者はあらで、婦女(おんな)の呻(うめ)く声のみ微々(ほそぼそ)と聞えつ。

渠(かれ)は居去(いざ)りつつ捜寄(さぐりよ)れば、袂(たもと)ありて手頭(てさき)に触れぬ。

「どうも、はや御面倒でございますが、小用場(こようば)をお教えなすって下さいまし。はい誠(まこと)に不自由な老夫(おやじ)でご

ざいます。」

渠(かれ)は路頭(ろとう)の乞食(こつじき)の如(ごと)く、腰を屈(かが)め、頭を下げて、憐(あわれみ)を乞えり。されどもなお応ずる者はあらざりしなり。盲人(めしい)はいよいよ途方(とほう)に暮れて、

「もし、どうぞ御願でございます。はいどうぞ。」

おずおずその袂を曳(ひ)きて、惻隠(そくいん)の情(こころ)を動かさむとせり。打俯(うちふ)したりし婦人(おんな)は蒼白(あおじろ)き顔をわずかに擡(もた)げて、

「ええ、もう知りませんよう！」

酷(むご)くも袂(たもと)を振払いて、再び自家(おのれ)の苦悩に悶(もだ)えつ。

盲人(めしい)はこの一喝(いっかつ)に挫(ひし)がれて、頸(くび)を竦(すく)め、肩を窄(すぼ)めて、

「はい、はい、はい。」

中

甲板(デッキ)より帰来(かえりきた)れる一個の学生は、室(しつ)に入(い)るよりその溽熱(むしあつさ)に辟易(へきえき)して、

「こりや劇(ひど)い！」と眉を顰(ひそ)めて四辺(あたり)を眴(みまわ)せり。

狼藉(ろうぜき)に遭(あ)えりし死骸(むくろ)の棄(す)てられたらむように、婦女等(おんなたち)は算(さん)を乱して手荷物の間に横(よこた)われり。

「やあ、やあ！　惨憺(さんたん)たるものだ。」

渠(かれ)はこの惨憺(みじめ)さと溽熱(むしあつ)さとに面(おもて)を皺(しわ)めつつ、手荷物の鞄(かばん)の中(うち)より何やらん取出(とりいだ)して、忙々(いそがわしく)立去らむ

としたりしが、たちまち左右を顧て、
「皆様、これじゃ耐らん。ちと甲板へお出でなさい。涼しくツてどんなに心地が快か知れん。」
これ空谷の跫音なり。盲人は急遽声する方に這寄りぬ。
「もし旦那様、何ともはや誠に申兼ねましてございますが、はい、小用場へはどちらへ参りますでございますか、どうぞ、はい。……」
盲人は数多渠の足下に叩頭きたり。
学生は渠が余りに礼の厚きを訝りて、
「うむ、便所かい。」とその風体を眺めたりしが、

「ああ、お前様不自由なんだね。」

かくと聞くより、盲人は飛立つばかりに懽びぬ。

「はい、はい。不自由で、もう難儀をいたします。」

「いや、そりゃ困るだろう。どれ僕が案内してあげよう。さあ、さあ、手を出した。」

「はい、はい。それはどうも、何ともはや、勿体もない、お難有う存じます。ああ、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。」

優しくも学生は盲人を扶けて船室を出でぬ。

「どッこい、これから階子段だ。気を着けなよ、それ危い。」

かくて甲板（デッキ）に伴（ともな）いて、渠（かれ）の痛入（いたみい）るまでに介抱（かいほう）せし後（のち）、

「爺様（じいさん）、まあここにお坐り。下じゃ耐（たま）らない、まるで釜烹（かまうで）だ。どうだい、涼しかろ。」

「はい、はい、難有（ありがと）うございます。これは結構で。」

学生はその側（かたわら）に寝転びたる友に向いて言えり。

「おい、君、最少（もすこ）しそっちへ寄ッた。この爺様（じいさん）に半座（はんざ）を分けるのだ。」

渠（かれ）は快くその席を譲りて、

「そもそも半座（はんざ）を分けるなどとは、こういう敵手（あいて）に用（つか）う易（やす）い文句じゃないのだ。」

かく言いてその友は投出したる膝（ひざ）を拊（う）てり。学生は

天を仰ぎて笑えり。

「こんな時にでも用(つか)わなくッちゃ、君なんざ生涯用(つか)う時は有りゃしない。」

「と先(まず)言ッて置(お)くさ。」

盲人(めしい)はおそるおそるその席に割入(わりこ)みて、

「はい真平御免(まっぴらごめん)下さいまし。はい、はい、これはどうも、お蔭様で助かりまする。いや、これは気持の快(よ)い、とんと極楽でございます。」

渠(かれ)は涼風の来(きた)るごとに念仏して、心窃(ひそ)かに学生の好意を謝(しゃ)したりき。

船室に在(あ)りて憂目(うきめ)に遭(あ)いし盲翁(めくらおやじ)の、この極楽浄土(ごくらくじょうど)

に仏性（ほとけしょう）の恩人と半座（はんざ）を分つ歓喜（よろこび）のほどは、著（しる）くもその面貌（おももち）と挙動とに露（あらわ）れたり。

「はい、もうお蔭様で老夫（おやじ）め助かりまする。こうして眼も見えません癖（くせ）に、大胆な、単独（ひとり）で船なんぞに乗りまして、他様（はたさま）に御迷惑を掛けまする。」

「まったくだよ、爺様（じいさん）。」

と学生の友は打笑（うちわら）いぬ。盲人（めしい）は面目（めんぼく）なげに頭（かしら）を撫（な）でつ。

「はい、はい、御尤（ごもっとも）で。実は陸（おか）を参ろうと存じましてございましたが、ついこの年者（としより）と申すものは、無闇（むやみ）と気ばかり急（せ）きたがるもので、一時（いっとき）も早く如来様（にょらいさま）が拝み

たさに、こんな不了簡（ふりょうけん）を起しまして。……」

「うむ、無理はないさ。」と学生は頷（うなず）きて、

「何も目が見えんからといって、船に乗られんという理窟（りくつ）はすこしもない。盲人（めくら）が船に乗るくらいは別に驚くことはないよ。僕は盲目（めくら）の船頭に邂逅（でッくわ）したことがある。」

その友は渠（かれ）の背（そびら）に一撃（いちげき）を吃（くらわ）して、

「吹くぜ、お株（かぶ）だ！」

学生は躍起（やっき）となりて、

「君の吹くぜもお株（かぶ）だ。実際ださ、実際僕の見た話だ。」

「へん、躄（いざり）の人力挽（じんりきひき）、唖（おし）の演説家に雀盲（とりめ）の巡査、いずれも御採用にはならんから、そう思い給え。」

「失敬な！　うそだと思うなら聞き給うな。僕は単独（ひとり）で話をする。」

「単独（ひとり）で話をするとは、覚悟を極（き）めたね。その志に免じて一條（ひとくさり）聞いてやろう。その代り莨（たばこ）を一本。……」

眼鏡越（ごし）に学生は渠（かれ）を悪（にく）さげに見遣（みや）りて、

「その口が憎いよ。何もその代りと言わんでも、与（く）れなら与（く）れと。……」

「与（く）れ！」と渠（かれ）はその掌（てのひら）を学生の鼻頭（はなさき）に突出（つきいだ）せり。

学生は直（ただち）にパイレットの函（はこ）を投付けたり。渠（かれ）はその

一本を抽出して、燐枝を袂に捜りつつ、
「うむ、それから。」
「うむ、それからもないもんだ。」
「まあそう言わずに折角話したまえ。謹聴々々。」
「その謹聴のきんの字は現金のきんの字だろう。」
「未だ詳ならず。」とその友は頭を掉りぬ。
「それじゃその莨を喫んで謹聴し給え。
去年の夏だ、八田潟ね、あすこから宇木村へ渡ッて、能登の海浜の勝を探ろうと思って、家を出たのが六月の、あれは十日……だったかな。
渡場に着くと、ちょうど乗合が揃ッていたので、す

ぐに乗込（のりこ）んだ。船頭は未だ到（い）なかツたが、所（ところ）の壮者（わかいもの）だの、娘だの、女房達（かみさん）が大勢で働いて、乗合（のりあい）に一箇（ひとつ）ずつ折（おり）をくれたと思い給え。見ると赤飯（こわめし）だ。」

「塩釜（しおがま）よりはいい。」とその友は容喙（まぜかえ）せり。

「謹聴（きんちょう）の約束じゃないか。まあ聴き給えよ。見ると赤飯（こわめし）だ。」

「おや。二個（ふたつ）貰（もら）ツたのか。だから近来（ちかごろ）はどこでも切符を出すのだ。」

この饒舌（じょうぜつ）を懲（こら）さんとて、学生は物をも言わで拳（こぶし）を挙（あ）げぬ。

「謝（あやま）ツた謝ツた。これから真面目（まじめ）に聴く。よし、見

ると赤飯(こわめし)だ。それは解(わか)ツた。」

「そこで……」

「食ったのか。」

「何を？」

「いや、よし、それから。」

「これはどういう事実だと聞くと、長年この渡(わたし)をやツていた船頭が、もう年を取ツたから、今度息子(むすこ)に艪(ろ)を譲ツて、いよいよ隠居(いんきょ)をしようという、この日(ひ)が老船頭、一世一代(いっせいちだい)の漕納(こぎおさめ)だというんだ。面白(おもしろ)かろう。」

渠(かれ)の友は嗤笑(せせらわら)いぬ。

「赤飯(こわめし)を貰(もら)ツたと思ってひどく面白がるぜ。」

「こりゃ怪（け）しからん！　僕が［＃「怪（け）しからん！　僕が」は底本では「怪（け）しからん！僕が」］赤飯（こわめし）のために面白がるなら、君なんぞは難有（ありがた）がッていいのだ。」

「なぜなぜ。」と渠（かれ）は起回（おきかえ）れり。

「その葉巻（はまき）はどうした。」

「うむ、なるほど。面白い、面白い、面白い話だ。」

渠（かれ）は再び横になりて謹聴（きんちょう）せり。学生は一笑（いっしょう）して後（のち）件（くだん）の譚（はなし）を続けたり。

「その祝（いわい）の赤飯（こわめし）だ。その上に船賃（ふなちん）を取らんのだ。乗合（のりあい）もそれは目出度（めでたい）と言うので、いくらか包んで与（や）る者もあり、即吟（そくぎん）で無理に一句浮べる者もありさ。まあ

思い思いに祝ツてやったと思いたまえ。」

例の饒舌先生はまた呶々せり。

「君は何を祝った。」

「僕か、僕は例の敷島の道さ。」

「ふふふ、むしろ一つの癖だろう。」

「何か知らんが、名歌だツたよ。」

「しかし伺おう。何と言うのだ。」

学生はしばらく沈思せり。その間に「年波」、「八重の潮路」、「渡守」、「心なるらん」などの歌詞はきれぎれに打誦ぜられき。渠はおのれの名歌を忘却したるなり。

「いや、名歌はしばらく預ツておいて、本文に懸ろう。そうこうしているうちに船頭が出て来た。見ると疲曳の爺様さ。どうで隠居をするというのだから、老者は覚悟の前だツたが、その疲曳が盲なのには驚いたね。

それがまた勘が悪いと見えて、船着まで手を牽れて来る始末だ。無途方も極れりというべしじゃないか。これで波の上を漕ぐ気だ。皆呆れたね。険難千方な話さ。けれども潟の事だから川よりは平穏だから、万一の事もあるまい、と好事な連中は乗ツていたが、遁げた者も四五人は有ツたよ。僕も好奇心でね、話の種だと思ツたから、そのまま乗って出るとまた驚いた。

実に見せたかッたね、その疲曳の盲者がいざと言ッて櫓柄を取ると、仡然としたものだ、まるで別人さね。なるほどこれはその道に達したものだ、と僕は想ッた。もとよりあのくらいの潟だから、誰だッて漕げるさ、けれどもね、その体度だ、その気力だ、猛将の戦に臨んで馬上に槊を横えたと謂ッたような、凛然として奪うべからざる、いや実にその立派さ、未だに僕は忘れんね。人が難のない事を（眠っていても出来る）と言うが、その船頭は全くそれなのだ。よく聞いて見ると、その理さ。この疲曳の盲者を誰とか為す！　若い時には銭屋五兵衛の抱で、年中千五百石積を家と

して、荒海を漕廻（こぎまわ）していた曲者（くせもの）なのだ。新潟から直江津ね、佐渡辺（あたり）は持場（もちば）であッたそうだ。中年（ちゅうねん）から風眼（ふうがん）を病（わず）らッて、盲（つぶ）れたんだそうだが、別に貧乏というほどでもないのに、舟を漕（こ）がんと飯（めし）が旨（うま）くないという変物（へんぶつ）で、疲曳（よぼよぼ）の盲目（めくら）で在（い）ながら、つまり洒落（しゃれ）半分に渡（わたし）をやッていたのさ。

　乗合（のりあい）に話好（はなしずき）の爺様（じいさん）が居（い）て、それが言ッたよ。上手な船頭は手先で漕（こ）ぐ。巧者（こうしゃ）なのは眼で漕（こ）ぐ。それが名人となると、肚（はら）で漕（こ）ぐッ。これは大（おお）いにそうだろう。沖で暴風（はやて）でも吃（く）ッた時には、一寸先は闇だ。そういう場合には名人は肚（はら）で漕（こ）ぐから確（たしか）さ。

生憎（あいにく）この近眼だから、顔は瞭然（はっきり）見えなかッたが、咥煙管（くわえぎせる）で艪を押すその持重加減（おちつきかげん）！　適（あっぱ）れ見物（みもの）だッたよ。」

饒舌（じょうぜつ）先生も遂に口を噤（つぐ）みて、そぞろに興（きょう）を催（もよお）したりき。

下

魚津（うおづ）より三日市（みっかいち）、浦山（うらやま）、船見（ふなみ）、泊（とまり）など、沿岸の諸駅（しょえき）を過ぎて、越中越後の境なる関（せき）という村を望むまで、陰晴（いんせい）すこぶる常ならず。日光の隠顕（いんけん）するごとに、天（そら）の

色はあるいは黒く、あるいは蒼(あお)く、濃緑(こみどり)に、浅葱(あさぎ)に、朱(しゅ)のごとく、雪のごとく、激しく異状を示したり。邇(ちか)く水陸を画(かぎ)れる一帯の連山中に崛起(くっき)せる、御神楽嶽飯豊山(おかぐらがたけいいとよさん)の腰を十重二十重(とえはたえ)に縈(めぐ)れる灰汁(あく)のごとき靄(もや)は、揺曳(ようえい)して巓(いただき)に騰(のぼ)り、見(み)る見る天上に蔓(はびこ)りて、怪物などの今や時を得んずるにはあらざるかと、いと凄(すさま)じき気色(けしき)なりき。

元来伏木(ふしき)直江津間の航路の三分の一は、遥(はるか)に能登半島の庇護(ひご)によりて、辛(から)くも内海(うちうみ)を形成(かたちつく)れども、泊(とまり)以東は全く洋々たる外海(そとうみ)にて、快晴の日は、佐渡島の模糊(もこ)たるを見るのみなれば、四面(しめん)淼茫(びょうぼう)として、荒波山(あらなみやま)

の崩るるごとく、心易かる航行は一年中半日も有難きなり。

さるほどに汽船の出発は大事を取りて、十分に天気を信ずるにあらざれば、解纜を見合すをもて、却りて危険の虞寡しと謂えり。されどもこの日の空合は不幸にして見謬られたりしにあらざるなきか。異状の天色はますます不穏の徴を表せり。

一時魔鳥の翼と翔りし黒雲は全く凝結して、一髪を動かすべき風だにあらず、気圧は低落して、呼吸の自由を礙げ、あわれ肩をも抑うるばかりに覚えたりき。

疑うべき静穏（せいおん）！　異（あや）しむべき安恬（あんてん）！　名だたる親不知（おやしらず）の荒磯に差懸（さしかか）りたるに、船体は微動だにせずして、畳（たたみ）の上を行くがごとくなりき。これあるいはやがて起らんずる天変の大頓挫（だいとんざ）にあらざるなきか。

船は十一分の重量（おもみ）あれば、進行極めて遅緩（ちかん）にして、糸魚川（いといがわ）に着きしは午後四時半、予定に後（おく）ること約（およそ）二時間なり。

陰※［＃「日＋（士／冖／一／一／口／一）」、38-9］（いんえい）たる空に覆（おお）われたる万象（ばんしょう）はことごとく愁（うれ）いを含みて、海辺の砂山に著（いちじ）るき一点の紅（くれない）は、早くも掲げられたる暴風警戒（けいかい）の球標（きゅうひょう）なり。さればや一艘（そう）の伝馬（てんま）も来（きた）らざ

りければ、五分間も泊（とどま）らで、船は急進直江津に向えり。すわや海上の危機は逼（せま）ると覚（おぼ）しく、あなたこなたに散在したりし数十の漁船は、北（にぐ）るがごとく漕戻（こぎもど）しつ。観音丸（かんのんまる）にちかづくものは櫓綱（ろづな）を弛（ゆる）めて、この異腹（いふく）の兄弟の前途を危（きづか）わしげに目送（もくそう）せり。

やがて遙（はるか）に能生（のう）を認めたる辺（あたり）にて、天色（そら）は俄（にわか）に一変せり。——陸（おか）は甚（はなは）だ黒く、沖は真白に。と見る間に血のごとき色は颯（さ）と流れたり。日はまさに入らんとせるなり。

ここ一時間を無事に保たば、安危（あんき）の間を駛（は）する観音丸（かんのんまる）は、恙（つつが）なく直江津に着（ちゃく）すべきなり。渠（かれ）はその

全力を尽して浪を截りぬ。団々として渦巻く煤烟は、右舷を掠めて、陸の方に頽れつつ、長く水面に横わりて、遠く暮色に雑わりつ。

天は昏瞢として睡り、海は寂寞として声無し。

甲板の上は一時頗る喧擾を極めたりき。乗客は各々生命を気遣いしなり。されども渠等は未だ風も荒まず、波も暴れざる当座に慰められて、坐臥行住思い思いに、雲を観るもあり、水を眺むるもあり、遐を望むもありて、その心には各々無限の憂を懐きつつ、惕息して面をぞ見合せたる。

まさにこの時、衝と舳の方に顕れたる船長は、

矗立(しゅくりつ)して水先を打瞶(うちまも)りぬ。俄然(がぜん)汽笛の声は死黙(しもく)を劈(つんざ)きて轟(とどろ)けり。万事休す！　と乗客は割るるがごとくに響動(どよめ)きぬ。

観音丸(かんのんまる)は直江津に安着(あんちゃく)せるなり。乗客は狂喜の声を揚(あ)げて、甲板(デッキ)の上に躍(おど)れり。拍手は夥(おびただ)しく、観音丸(かんのんまる)万歳！　船長万歳！　乗合(のりあい)万歳！

八人の船子(ふなこ)を備えたる艀(はしけ)は直(ただ)ちに漕(こぎ)寄せたり。乗客は前後を争いて飛移れり。学生とその友とはやや有(あ)りて出入口に顕(あらわ)れたり。その友は二人分の手荷物を抱(かか)えて、学生は例の厄介者(やっかいもの)を世話して、艀(はしけ)に移りぬ。

艀(はしけ)は鎖(くさり)を解(と)きて本船と別るる時、乗客は再び

観音丸（かんのんまる）と船長との万歳を唱（とな）えぬ。甲板（デッキ）に立てる船長は帽（ぼう）を脱（だっ）して、満面に微笑（えみ）を湛（たた）えつつ答礼せり。艀（はしけ）は漕出（こぎいだ）したり。陸（りく）を去る僅（わずか）に三町（ちょう）、十分間にして達すべきなり。

折から一天俄（いってんにわか）に掻曇（かきくも）りて、颷（ど）と吹下す風は海原を揉立（もみた）つれば、船は一支（ひとささえ）も支（ささ）えず矢を射るばかりに突進して、無二無三（むにむさん）に沖合へ流されたり。

舳艪（ともろ）を押せる船子（ふなこ）は慌（あわ）てず、躁（さわ）がず、舞上（まいあ）げ、舞下（まいさぐ）る浪（なみ）の呼吸を量（はか）りて、浮きつ沈みつ、秘術を尽して漕（こ）ぎたりしが、また一時暴増（ひときりあれまさ）る風の下に、瞻（みあぐ）るばかりの高浪（たかなみ）立ちて、ただ一呑（ひとのみ）と屏風倒（びょうぶだおし）に頽（くず）れんずる凄（すさま）じさ

に、剛気（ごうき）の船子（ふなこ）も啊呀（あなや）と驚き、腕（かいな）の力を失う隙（ひま）に、艫（へさき）はくるりと波に曳（ひか）れて、船は危（あやう）く傾（かたぶ）きぬ。

しなしたり！　と渠（かれ）はますます慌（あわ）てて、この危急に処すべき手段を失えり。得たりやと、波と風とはますます暴（あ）れて、この艀（はしけ）をば弄（もてあそ）ばんと企（くわだ）てたり。

乗合（のりあい）は悲鳴して打騒（うちさわ）ぎぬ。八人の船子（ふなこ）は効（かい）無き櫓柄（ろづか）に縋（すが）りて、

「南無金毘羅大権現（なむこんぴらだいごんげん）！」と同音（どうおん）に念ずる時、胴（どう）の間（ま）の辺（あたり）に雷（らい）のごとき声ありて、

「取舵（とりかじ）！」

舳櫓（ともろ）の船子（ふなこ）は海上鎮護（ちんご）の神の御声（みこえ）に気を奮（ふる）い、やに

わに艪(ろ)をば立直して、曳々声(えいえい)を揚(あ)げて盪(お)しければ、船は難無(なんな)く風波(ふうは)を凌(しの)ぎて、今は我物なり、大権現(だいごんげん)の冥護(みょうご)はあるぞ、と船子(ふなこ)はたちまち力を得て、ここを先途(せんど)と漕(こ)げども、盪(お)せども、ますます暴(あ)るる浪(なみ)の勢(いきおい)に、人の力は限有(かぎりあ)りて、渠(かれ)は身神(しんしん)全く疲労して、将(まさ)に昏倒(こんとう)せんとしたりければ、船は再び危(あやう)く見えたり。

「取舵(とりかじ)！」と雷(らい)のごとき声はさらに一喝(いっかつ)せり。半死の船子(ふなこ)は最早(もはや)神明(しんめい)の威令(いれい)をも奉(ほう)ずる能(あた)わざりき。

学生の隣に竦(すく)みたりし厄介者(やっかいもの)の盲翁(めくらおやじ)は、この時(とき)屹然(きつぜん)と立ちて、諸肌寛(もろはだくつろ)げつつ、

「取舵(とりかじ)だい‼」と叫ぶと見えしが、早くも舳(とも)の方(かた)へ

転行き、疲れたる船子の握れる艪を奪いて、金輪際より生えたるごとくに突立ちたり。

「若い衆、爺が引受けた！」

この声とともに、船子は礑と僵れぬ。

一艘の厄介船と、八人の厄介船頭と、二十余人の厄介客とは、この一個の厄介物の手に因りて扶けられつつ、半時間の後その命を拾いしなり。この老いて盲なる活大権現は何者ぞ。渠はその壮時において加賀の銭屋内閣が海軍の雄将として、北海の全権を掌握したりし磁石の又五郎なりけり。

底本：「新潟県文学全集　第1巻　明治編」郷土出版社
　　１９９５（平成７）年10月26日発行
底本の親本：「泉鏡花全集1」岩波書店
初出：「太陽　創刊号」
入力：高田農業高校生産技術科流通経済コース
校正：小林繁雄
２００６年９月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。